



Title	北海道中央ユーラシア研究会の歩みとこれからの中央ユーラシア研究
Author(s)	宇山, 智彦
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 196-201 中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念. 北海道中央ユーラシア研究会編
Issue Date	2012-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51958
Type	bulletin (article)
Note	北海道中央ユーラシア研究会 第100回記念大会. 第2部. ISBN: 9784938637736
File Information	SEP5_009.pdf



[Instructions for use](#)

北海道中央ユーラシア研究会 第 100 回記念大会 第 2 部

北海道中央ユーラシア研究会の歩みとこれからの中央ユーラシア研究
宇山 智彦

(北海道大学スラブ研究センター教授)

日 時 : 2012 年 7 月 14 日 (土) 16:10-17:00

場 所 : 北海道大学スラブ研究センター4 階大会議室

司会者 : 長縄宣博 (北海道大学スラブ研究センター准教授)

参加者 : 28 名

1. 北海道中央ユーラシア研究会の歴史

北海道中央ユーラシア研究会が第 100 回を迎えたことには、この会の運営責任者を一貫して務めてきた私にとって、大変感慨深いものがある。まずは、個人的な思い出も交えながら、研究会の歩みを簡単に振り返ってみたい。

札幌での研究会の発足は 2000 年だが、前史として、東京での研究会活動があった。1993 年に、東京大学の院生だった宇山と、東京外国語大学の院生だった坂井弘紀 (以下敬称略) らが東洋文庫の近くのファミリー・レストランで打合せ会議を開き、東京外国語大学の小松久男研究室を拠点に、「中央アジア研究会」を発足させたのである。ごく小規模の研究会だったが、のちの北海道中央ユーラシア研究会と同様、中央アジアに関する研究を分野を問わず対象とし、東京のさまざまな大学の院生・学部生から、中央アジアに個人的な興味を持つ社会人まで、個性的なメンバーが集まっていた。電子メールなどほとんどない時代だったので、例会の際に次回の予定を決め、必要な時にはメンバーに電話をかけるという原始的な連絡方法をとっていたのも懐かしい。

私は 1994 年から 2 年間カザフスタンに行き、1996 年に北海道大学スラブ研究センターに着任したため、中央アジア研究会の運営の中心からは約 1 年で外れた。同会は小松教授や他のメンバーの熱意によりその後も活動を続け、例会は 49 回を数えたが、次第に開催間隔が空き、2000 年初め以降は休眠状態になってしまった (その後 2006 年にイスラーム地域研究プロジェクトの一環として復活し、不定期に活動)。このことを嘆いていた私は、2000 年 4 月、坂井がスラブ研究センター非常勤研究員として着任したのを機に、新たに札幌で研究会を作ることを決意した。そして 4 月 24 日、中央アジア史研究の伝統がある北海道大学文学部東洋史の OB・院生数人を招いて、スラブ研究センター非常勤研究員室で準備会合を開き、「北海道中央アジア研究会」を設立した。発足時のメンバーは、宇山、坂井、川

口琢司、長峯博之¹、会田理人であった。川口、長峯、会田の3人は東洋史関係者であり、当時はかなり東洋史の色が濃い研究会だったと言ってよい。

北海道中央アジア研究会の活動は、2000年5月27日に開かれた第1回例会の長峯報告から始まった。以後の例会の一覧は本書の「例会一覧」に見る通りであるが、第2回例会で、共に当時東京大学院生だった地田徹朗と野田仁が報告したのを皮切りに、札幌だけでなく東京・関西・九州などからも報告者を迎えてきたのは当会の大きな特徴である。

2001年度からは、北大東洋史に助教授として着任したイスラーム史研究者の森本一夫が会に参加した。支笏湖での合宿など、この頃には特に楽しい思い出が多い。2002年度からは、スラブ研究センターが協力講座として担当する大学院文学研究科スラブ社会文化論専修に、中央ユーラシア研究を専攻する院生たちが入学したことにより、大学院生が研究会の事務・連絡を担うようになった。2002年9月～2003年8月には宇山が在外研究のため不在となったが、森本が運営責任者を代行したことで、会は順調に活動を続けられた。

活動が発展するにつれ、報告テーマも、中央アジアに限らず、カフカス、ヴォルガ・ウラル、イラン、アフガニスタン、オスマン帝国などに広がるようになり、会名の中の地域名称もより広いものにする必要が生じたため、会は2003年12月、「北海道中央ユーラシア研究会」に改称した。これは、スラブ研究センターに2002年に中央ユーラシア部門が設置されたことと連動して、札幌が中央ユーラシア研究の一大拠点であることを世に示すことになった。

2004年4月からは、例会のほかにテュルク諸語講読会を開始した。カザフ語（アラビア文字）から始め、アゼルバイジャン語、タタール語なども扱い、2007年まで断続的に開催した。スラブ研究センターでは発表演語としての英語能力の向上が重視される反面、ロシア語以外のスラブ・ユーラシア地域の言語を訓練する場は意外に少なく、この講読会は貴重な機会であった。主に私の多忙により近年開けなくなっていることが残念である。

また、森本が2005年に北大を離任して以降の研究会は、彼の後任の守川知子や吉開将人らの協力を随時仰いではいるものの、東洋史関係者の参加が以前より少なくなってしまう。他方、事務局を構成するスラブ社会文化論専修の院生たちの積極性と創意工夫はいっそう増している。彼らの提案により、2008年2月の第68回例会から討論者制を導入し、報告要旨と討論内容を記録してウェブサイトで公開している。また、数としては多くないが、院生の海外滞在記やエッセイもサイトに掲載している。

このような活動歴を経て、2012年7月14日、北海道中央ユーラシア研究会は、晴れて第100回記念大会を迎えた。これまでに例会・大会・昼食懇談会・特別企画・特別講演会は計105回、報告は125本、報告者（実数）は70人にのぼる。

¹ 現在の姓の表記は長峰。

2. 日本の近現代中央ユーラシア研究の歩みと特徴

北海道中央ユーラシア研究会の活動は、言うまでもなく、日本そして世界の中央ユーラシア研究の一部をなすものである。この会が関わる研究活動が今後どうあるべきかを考える前提として、日本における中央ユーラシア研究（特に近現代に関するもの）の歩みを簡単に振り返ってみたい²。

日本の東洋史学の初期の発展を担った学者の一人である白鳥庫吉が西域史研究で名声を得たことに見られるように、中国西方地域を中心とする中央アジアの古代史・中世史研究は、漢文史料に強い日本人研究者の得意分野として長く発展してきた。1970年代には、漢文史料を多用しもっぱら東西交渉史・シルクロード史の舞台として中央アジアを見る傾向への批判が高まり、いわゆる「シルクロード史観論争」（間野英二らによる「シルクロード史観」批判と護雅夫らによる反論³）が起きた。この論争自体には決着がつかなかったが、ペルシア語、テュルク語などで現地で書かれた史料を用いて中央アジア史を内側から解明しようという姿勢は歴史研究者の間に定着し、特にティムール朝などの中世・近世史研究が発展した。

ソ連領中央アジアやヴォルガ・ウラル地域の近現代史への関心がようやく高まり始めたのは、1970年代末から80年代のことであった。この動きには、山内昌之、小松久男ら東洋史研究者と、木村英亮、西山克典らロシア・ソ連史研究者の双方が関わっていた⁴。彼らの間には観点や使う史料の違いがかなりあったが（東洋史研究者はロシア語を含む多言語の史料を使ったが、当時のロシア史研究者がロシア語以外の現地語史料を使うことはほとんどなかった）、中心的な関心が民族問題にあったことは共通していた。

1980年代末から90年代にかけて、ペレストロイカ期の民族問題とソ連崩壊による独立諸国誕生で、中央アジアとその周辺地域はますます注目を集め、これらの地域の研究を専攻する大学院生や、他の地域を専門としながら中央アジアに関心を持つ研究者も増え始め

² 明治時代以来の研究文献目録として、ユネスコ東アジア文化研究センター編『日本における中央アジア関係研究文献目録 1879年-1987年3月』1988年（「索引・正誤」1989年。1990年代までアップデートされたものが<http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000043BCAJ>でオンライン検索可能）。近年の研究動向紹介は多数ある。KOMATSU Hisao, “Modern Central Eurasian Studies in Japan: An Overview 1985–2000,” in Stéphane A. Dudoignon and KOMATSU Hisao, eds., *Research Trends in Modern Central Eurasian Studies (18th–20th Centuries): A Selective and Critical Bibliography of Works Published between 1985 and 2000*, part 1 (Tokyo: Toyo Bunko, 2003), pp. 127–155; 小松久男「近現代史研究の眺望と課題：イスラム地域を中心に」『内陸アジア史研究』第26号、2011年、69–74頁、など。

³ 間野英二『中央アジアの歴史：草原とオアシスの世界』講談社現代新書、1977年；護雅夫『草原とオアシスの人々（人間の世界歴史7）』三省堂、1984年、など。宇山智彦『中央アジアの歴史と現在（ユーラシア・ブックレット7）』東洋書店、2000年、第1章も参照。

⁴ 後に本にまとめられたものも含めれば、山内昌之『スルタンガリエフの夢：イスラム世界とロシア革命』東京大学出版会、1986年；小松久男『革命の中央アジア：あるジャディードの肖像』東京大学出版会、1996年；木村英亮『スターリン民族政策の研究』有信堂、1993年；西山克典『ロシア革命と東方辺境地域：「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会、2002年、など。

た。これはややもすれば、中央アジアがロシア研究のテリトリーなのか中東研究のテリトリーなのかなどをめぐって、非専門的な議論や混乱が生じる可能性を伴っていたが、中央アジア専門の研究者は、ロシア研究出身か東洋史出身かという区別を越えて、中央アジア研究を一分野として確立させるために団結した。前節で述べた、1993 年の中央アジア研究会結成以来の流れもその現れである。

1990 年代には、民族問題に限らず社会・文化に関わるさまざまな事象を扱って、総合的な中央アジア地域研究を行う流れができたほか、現地調査・留学が比較的容易に行えるようになり、一次史料や現地感覚を活かした研究の質的变化が見られた。特に、フィールドワークが可能になったことにより、中央アジアを対象とした文化人類学研究が確立したことは大きな変化である。また、中央アジアのほかにカフカスやヴォルガ・ウラルを専門とする研究者も徐々に増え、互いに関連し合いながら、中央ユーラシア研究という分野を形成していった。

1990 年代末以降は、関連研究者の総力を挙げて中央アジア研究・中央ユーラシア研究の標準的な概説、事典などが整備され⁵、大学院生や一般市民が入門的な知識を得やすくなった。同時に、日本での国際シンポジウムの開催、国際学会への参加などを通じて、諸外国（主に中央ユーラシア現地と欧米）の研究者との交流・共同研究が発展した⁶。このように共著書・編著書が多く出される一方、モノグラフが少ないことは日本の中央ユーラシア研究が克服すべき課題とされていたが、2000 年代半ば以降、博士論文などをもとにしたモノグラフが次々と刊行されるようになっていく⁷。

⁵ 小松久男編『中央ユーラシア史（新版世界各国史 4）』山川出版社、2000 年；宇山『中央アジアの歴史と現在』；宇山智彦編著『中央アジアを知るための 60 章』明石書店、2003 年；岩崎一郎、宇山智彦、小松久男編著『現代中央アジア論：変貌する政治・経済の深層』日本評論社、2004 年；小松久男、梅村坦、帯谷知可、堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005 年；北川誠一、前田弘毅、廣瀬陽子、吉村貴之編『コーカサスを知るための 60 章』明石書店、2006 年、など。

⁶ 国際シンポジウムや共同研究の成果として、KOMATSU Hisao, OBIYA Chika, and John S. Schoeberlein, eds., *Migration in Central Asia: Its History and Current Problems* (Osaka: The Japan Center for Area Studies, 2000); A. Urunbaev, T. HORIKAWA et al., eds., *Katalog khivinskikh kaziiskikh dokumentov XIX – nachala XX vv.* (Tashkent and Kyoto, 2001); Stéphane A. Dudoignon and KOMATSU Hisao, eds., *Islam in Politics in Russia and Central Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)* (London: Kegan Paul, 2001); Nurbulat Masanov, Erlan Karin, Andrei Chebotarev, and OKA Natsuko, *The Nationalities Question in Post-Soviet Kazakhstan* (Chiba: Institute of Developing Economies, 2002); UYAMA Tomohiko, ed., *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia* (Sapporo: Slavic Research Center, 2007); NAGANAWA Norihiro, D. M. Usmanova, HAMAMOTO Mami, eds., *Volgo-Ural'skii region v imperskom prostranstve XVIII–XX vv.* (Moscow: Vostochnaia literatura, 2011); UYAMA Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2012) など。

⁷ 吉田世津子『中央アジア農村の親族ネットワーク：クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』風響社、2004 年；岩崎一郎『中央アジア体制移行経済の制度分析：政府-企業間関係の進化と経済成果』東京大学出版会、2004 年；ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像：中央アジア社会の伝統と変容』東京大学出版会、2006 年；樋渡雅人『慣習経済と市場・開発：ウズベキスタンの共同体にみる機能と構造』東京大学出版会、2008 年；濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム：17-18 世紀タタ

こうして日本の中央ユーラシア研究は、過去 20 年あまりの間に急速な発展を遂げ、成熟してきた。ここでは詳述しないが、こうした歩みは、欧米の中央ユーラシア研究とも概ね共通している。そのうえで、欧米と比べても日本の中央ユーラシア研究に特徴的である点をまとめれば、以下のようなだろう。

- ① 東洋学的な要素とロシア研究的な要素の緊密な結合⁸。現地語史資料（たとえば近代知識人の著作・新聞）の重視。
- ② 東京（東京大学、東京外国語大学、中央大学など）、札幌（スラブ研究センター）、関西（京都大学、総合地球環境学研究所）の諸拠点の連携。
- ③ 研究者の数は決して多くないが、研究対象国のバランスはかなりよく取れている。また、ムスリム地域と非ムスリム地域の双方に目配りをしている（非ムスリム地域の研究として、当研究会関係では後藤正憲のチュヴァシ研究、前田弘毅のグルジア研究、井上岳彦のカルムイク研究、桜間瑛のクリャシェン研究、竹村寧乃のザカフカス連邦研究など）。

3. 研究状況の問題点と今後の課題

最後に、中央ユーラシア研究のいくつかの課題を、北海道中央ユーラシア研究会の活動とも関連させながら簡単に論じたい。

- ① 地域的に見た場合、旧ソ連側中央ユーラシアを研究する人々と中国領中央アジア（東トルキスタン）を研究する人々は常に手を携えてきたが⁹、両者が互いの研究内容を深く理解して一体の中央アジア像を描けてきたとは必ずしも言えない。旧ソ連側についての研究が中心となっている北海道中央ユーラシア研究会としても、東トルキスタンの研究をいっそう積極的に取り込んでいくことが望まれる。また、中央アジアと歴史的に深い関係にあるモンゴルの研究、およびモンゴルやカルムイクと歴史的・宗教的に深い関係にあるチベットの研究とも連携を深める必要があろう。時代的にも、中央アジアのイスラーム化以前と以後、前近代と近現代の研究の壁の克服はなかなか難しい。設立当初に比べ前近代史研究の比率が低下している当会も課題として意識すべきところである¹⁰。分野的には、坂井の口承文芸研究などを除けば、文学・文化研究が手薄である。中央ユーラシアの豊かな文化

ール人の正教改宗』東京大学出版会、2009年；野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』東京大学出版会、2011年；藤本透子『よみがえる死者儀礼：現代カザフのイスラーム復興』風響社、2011年、など。

⁸ 宇山智彦（程艳阳訳）「日本の中部欧亚研究：俄罗斯研究与东方研究的紧密结合」『俄罗斯研究』2011年第1期、122-127頁、参照。

⁹ 例えば日本中央アジア学会<<http://www.jacas.jp/>>の活動は、旧ソ連側中央アジアの研究と中国領中央アジアの研究のバランスが概ねとれたものとなっている。

¹⁰ 近代中心でモンゴル、チベットを切り離しがちな中央ユーラシア研究の動向に対する古代史家の批判として、森安孝夫「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」『内陸アジア史研究』第26号、2011年、3-34頁、参照。

を研究・紹介することは、この地域に対する一般社会の関心を深めるためにも重要である。

② 地域研究の重要性が数十年にわたり唱え続けられてきたとはいえ、学問や大学教育の体系が基本的にディシプリン別になっており、それらディシプリンが先進国・大国の社会・文化のあり方に基づいて構築されていて、中央ユーラシアのようにマイナーとされる地域の研究が軽視されがちである現実は否定できない。近年スラブ研究センターで行われている比較帝国論や権威主義体制論では中央ユーラシアが重要な位置を占めており、比較研究を通して、中央ユーラシア研究が歴史学、政治学、経済学、人類学などにさらなる理論的貢献をしていくことが望まれる。

③ ベテラン・中堅世代が研究の統括や所属する組織の業務などで過重負担を負い、若手は就職難に苦しむという現象はどの研究分野でも見られるものだが、中央ユーラシア研究では特に著しいように思える。就職難は研究者養成制度や大学のポスト配分の構造的問題だが、研究が過度に細分化し、広い分野の教育や研究を担える人材が少なくなっていることも一因であろう。特定の国の特定のテーマのことしか分からないのは、就職にも、中央ユーラシア研究の発展のためにもマイナスである。特定のテーマを掘り下げる博士論文を書くと同時に、広範囲の知識を身につけて概説・総論を書ける研究者になることを、院生・若手に勧めたい。

④ 中央ユーラシア地域に関心を持っている人は、外交、国際協力、ビジネスなど実務の分野でも決して少なくない。実務関係者との連携の推進は、研究者の社会貢献という意味でも、若手が視野と人脈を広げるためにも重要である。

⑤ せっかく発展してきた研究分野をじり貧にしないための鍵は、中央ユーラシア地域とその研究の魅力を一般社会や学部生に向けてどう伝えられるかにもあろう。専門分野が何であれ、研究対象地域の現状を紹介・分析することは地域研究者の責務と考えたい¹¹。発信の方法も、出版、講演、ブログ¹²、当会のような研究会への勧誘などさまざまありうる。教員、研究員、院生、実務家などがそれぞれの立場でできることは何か、考えていく必要がある。

¹¹ 当会関係者が研究対象地域で起きた事件に即応して書いた分析の最近の例として以下を参照。宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の再チャレンジ革命：民主化・暴力・外圧」北海道大学スラブ研究センターウェブサイト<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100420uyama_j.html>、2010年4月20日掲載、1-10頁；桜間瑛「カザンの凶弾」『スラブ研究センターニュース』130号、2012年8月、14-18頁；長縄宣博「7月19日のカザンにおけるテロの背景に関する一考察」同、18-23頁。

¹² 話題としては中央ユーラシアを中心としているわけではないが、中央ユーラシアおよび日本を含む世界の政治・社会・文化を広く論じたブログとして、河東哲夫・元駐ウズベキスタン大使のサイト<<http://www.japan-world-trends.com/>>を参照。